

日本における禹王信仰の現存形態及びその現代的価値：日中間の歴史的文化的関係の一案例

著者	王 敏
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	15
ページ	3-33
発行年	2018-03-30
URL	http://doi.org/10.15002/00021323

日本における禹王信仰の現存形態及び その現代的価値

——日中間の歴史的文化的関係の一案例

王 敏

1. はじめに

小文は日本における禹王信仰の現存形態及びその現代的価値に関して一考察を述べたい。古代中国における三人の聖君「堯・舜・禹」の名は中国史に関心のある人の多くの知るところだが、そのうち最後の「禹」は歴代王朝の最初の「夏」を創始したとされてきた。また、禹が伝説上の主人公としては、黄河の治水に成功したと言い伝えられる治水の指導者でもある。中国文明の母という黄河を治めたので、中国史で最初に取り上げられる重要な歴史上の人物となる。この結果、神話を打ち消すような、歴史上の人物扱いが中国では近年強まっているように思われる。

堯、舜の治世に洪水が相次ぎ、大地が荒れた。禹の父の鯀（こん）が命を受け治水にあたったが、失敗する。かわって子の禹が治水事業を継承する。儒教の経典『論語』は禹を仁徳に優れた理想の王として絶賛しているが、治水に身を粉にして働いた8年間、一度も家に戻らなかったというのである。「禹外にあること八年、三たび其の門を過ぐれども入らず」（騰文公章句）というのだから、全国を駆け巡って河を治め、農業を主体に産業を興し、民の暮らしの充実に努めたのである。治水を軸に治世を向上させたのである。しかも自分は質素にしたため、禹の評価はいやがうえにも高まった。

古代中国史に詳しい岡村秀典氏の『夏王朝 王権誕生の考古学』（講談社、2003年）によると、近年の中国考古学の成果はめざましく、中国の公式見解で夏王朝の始まりは紀元前2070年、夏から殷への交替が紀元前1600年という。

夏の中心都市として河南省二里头遺跡も詳細な発掘がなされ、夏王朝の実ははいよいよ疑いのないものとなりつつある。これにあわせて、建国者として禹にフットライトが当たるわけである。

治水事業は氾濫の頻度と相俟って絶えることがない。禹の功績がそのたびに呼び起される。さらに現在の中国で国を挙げての「中華民族の偉大な復興」運動に後押しされて、禹の再評価が進み、大禹精神が唱えられている。

日本では、禹を治水神として敬ったり祀ったりする遺跡が多いことが分かった。その発見の原動力を担ったのは、神奈川県の郷土史研究組織「足柄の歴史再発見クラブ」であるが、2013年から治水神禹王研究会（会長：大脇良夫氏）の研究活動により、研究活動が全国に広がっている。

その「禹」が日本では治水神として信仰対象になっている実態に注目したい。本論題に関する考察が2006年、神奈川県文化振興財団の主催による地域文化促進する会議¹に参加して以来始まっている。

当初、神奈川県南足柄地域にある1726年に建てられた「文命碑」が調査対象の第1号となった。それに徳川時代の民生、治水への功績で知られていた田中丘隅（1662～1730）が作成、荻生徂徠²が推敲した碑文が刻まれている。同碑の調査で先行していた「足柄の歴史再発見クラブ」の活動に触発されて、筆者が朝日新聞などのほかに、2008年7月24日に発刊された『文藝春秋』28号誌上で全国の読者に向け、各地の禹王にちなむ史跡の共同調査を呼びかけた。

現在、治水神・禹王研究会の推進のもとに、2017年11月までに132か所の相關実物、史跡がほぼ全国の都道府県に広がっていることが確認された。この間、2010年11月、神奈川県開成町で全国の民間禹王研究者が集い、第1回日本全国禹王サミットが開催された。2012年10月には、群馬県の片品村³で第2回、第

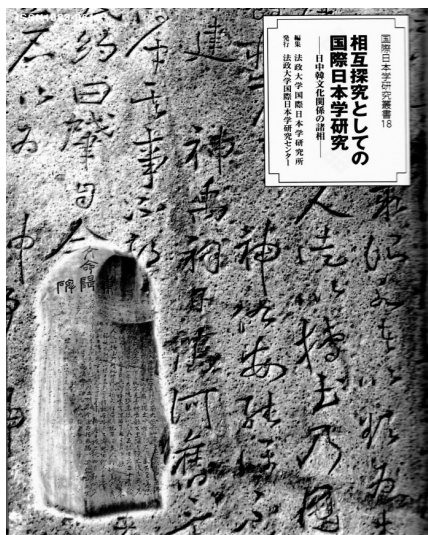
¹ 2006年の秋に行われた21世紀神奈川円卓会議「地球と地域の協働の道」の会合で、隣席の神奈川県開成町の露木順一町長（当時）より、開成町という町名が中国古典『易経』に由来しており、同町と南足柄地域の境には中国古代史の禹王治水を絡む地元の治水記念する史跡、「文命碑」という石碑があることを伺った。

² 荻生徂徠（1666～1728）江戸中期の儒学者・思想家である。徳川五代将軍・綱吉の知己を得ている。「文命碑」とのかかわりに関する調査が、地元の郷土史研究会「足柄の歴史再発見クラブ」によって行われ、一部解明されていた。

³ 片品村は群馬県北東部に位置する村。尾瀬国立公園に隣接しており、片品川沿いに1874年に建立された「大禹皇帝碑」がある。

3回は2013年7月に高松市⁴で催し、治水神・禹王研究会が設立された。第4回は10月17～18日に広島市⁵で開催される予定であったが、開催直前の豪雨による土砂石流の災害によって実開催を見送った。第5回は2015年9月、大分県臼杵市⁶で開催された。同市には日本に一つしかない、中国起源の農業の神・后稷とコラボレーションした「大禹后稷合祀石碑」(1740年建立)がある。そして、第6回は2017年10月、山梨県の富士川町が開催地となった。

筆者の編になる論文集『相互探求としての国際日本学研究 日中韓文化関係の諸相』(2013年3月、法政大学国際日本研究所発行)の表紙に足柄地域の「文命碑」碑文の拓本を使用した。碑文からは「神禹」の二字が鮮明に読み取れる。



写真(王敏) 文命碑の概観

- 4 高松市は四国地方に位置する香川県の県庁所在地。四国の政治経済の中心地であり、栗林公園に1637年に建立された「大禹謨」碑がある。
- 5 広島市は中国地方に位置する。宮島と原爆ドームの2つの世界遺産を有する。太田川沿いに1972年に建立された「大禹謨」碑がある。
- 6 臼杵市は九州地方の大分県東海岸に位置する。国宝の臼杵大仏や醤油の製造で有名。「大禹后稷合祀之碑」がある。



写真(王敏) 表紙使用した拓本の原碑



写真(竹内義昭) 白杵市にある「禹稷合祀の碑」⁷

こうして日本における禹王信仰の形態に関する調査が日本各地の国民の支援のもとで本格的に始まり、禹王信仰の受容及びその展開を考察する研究も進められることになっている。本論では、未熟な初期考察を通して、治水神・禹王信仰が日本文化の一部となったものの、その深層に「混成文化」という特質が堅実に血肉化していることを指摘したい。「混成」という言葉は、老子の『道德経』の第25章の「有物混成、先天地生」に結びつく。文化人類学の立場から青木保氏が日本文化の特質について、「混成文化」(『異文化理解』岩波書店)を提唱されている。さらにその現代的価値を抽出して日中相互の「参照枠」となる参考資料たりうることを願う。

⁷ 写真の提供者である竹内義昭氏は第5回禹王まつり・禹王サミット in 白杵大会実行委員会の事務局長を務められた。

なお、小文は2015年11月、復旦大学日本研究センターの主催による第25回国際会議「冷戦後の日本における社会文化的変化及び日中関係への影響」にて、「検証：歴史的文化的「接点」の協働及びその現代的価値」という題で発表したうえ、加筆したものである。

2. 大川三島神社の天井漢詩（静岡県東伊豆町の大川温泉地区）に関する調査

(1) 大川三島神社の中国風彫刻

神社は伊豆急行線・伊豆大川駅を降り、海側に下り東へ500メートル余り、海岸沿いの国道縁に、こじんまりした古びた三島神社（通称大川三島神社）があった。鳥居は新しいが、参道の高さ10メートルほどの石段を上りつめるとすぐに本殿があった。高さ数メートルほどとなる。

神社に関する印刷された資料がほとんどなく、実際の住職・山田稔さんが手書きで整理した沿革を再整理してまとめると、三島神社は歴史が古く、残っている棟札によって最初の修復が1454年という。創建はさらにさかのぼる。本殿正面などに江戸時代末期の1853年、堂宮彫刻の名工石田半兵衛の作品が残り、中国の仙人や吉祥シンボルを題材にした創作構想が明確に訴えられている。ペリー来航のころ、現存の本殿が建てられたと伝わり、当時の350万両もかけたというから大川地区の経済力が殷賑を極めていたことを物語る。

江戸時代を彩らせた名工の一人と数える堂宮彫刻家石田半兵衛が松崎町の出身で、その父先代も、また長男（のちの小沢一仙）、次男富次郎、四男徳藏とその長男俊吉も堂宮彫刻の名工であった。半兵衛の代表作が大川三島神社の拜殿意外に数多く残っているが、「唐獅子」が1293～1299年に創建された浄土真宗本願寺派の寺・浄感寺の本堂にある。その経緯には、同郷である漆喰鍍絵の名工入江長八（1815～1889）に関係している。

入江長八が19歳のとき江戸に出て狩野派の絵師のもとで修行をし、彫刻の技と左官の技術を応用して漆喰とコテによる独自の芸術を創出した。1845年に浄感寺が再建された際、弟子を手伝い、寺内に天井絵、彫刻、漆喰細工を多く作った。地域文化の財産を大切に守るために、1847年に建築された浄感

寺本堂は、長八の菩提寺という立場からも、後に「長八記念館」となった。そこに長八の墓、記念碑（碑文は芸術院会員結城素明画伯）、胸像（日展審査員堤達男氏作）が合わせて立っている。

石田半兵衛と入江長八の接点は同じ故郷というだけではない。二人は松崎の漢学者土屋三余(1815～1866)が開いた三余塾の同学でもある。二人とその師、師弟三人の接点に注目したい。三人とも江戸で漢学を学んだ。漢学の内容を基礎素材とする狩野派の美術と彫刻、漆喰細工に対して程度の差があるものの、三人とも造詣が深い。江戸時代に生きた知識人の精神性と共通の教養を持つ松崎名士一派である。江戸から帰郷した三人は、地域文化の中心である神社、寺院に作品をつくったり、塾生を育成したりして、漢文的教養を機軸とした時代精神の伝道者を成した。大川三島神社の天井に漢詩を書いたのも、その活動に合致した背景だと推察される。

江戸時代のこうした普遍的文化風潮について、筆者の博士論文『宮沢賢治と中国』（国際言語文化振興財団、2001年）第2章「【瘤が三つ】の聖人・神農に迫る」（183～197ページ）の中でも、入江長八美術館について述べてきた。その時代に禹王と共通の性格を持つ神農信仰が深く、入江長八が神農像を彫刻した。その作品の制作経緯に関する調査を、上述の博士論文に含めさせていた。

さて、筆者が入江長八美術館と神農像に関連する調査をしていた経緯を簡潔に紹介しておきたい。2000年、博士論文を完成するために、当時、宮沢賢治が上京のたびによく利用した帝国図書館（1906年建立）で賢治の読書リストを調べた。同館は2000年から日本初の国際子ども図書館となった（英語名はInternational Library of Children's Literature）。その際、展示催事紹介のコーナーで入江長八美術館のチラシを見つけた。そこには、神農の彫刻坐像が大きく印刷されていた。

その後、入江長八美術館では展示終了という理由で、館内で神農像そのものを見ることはできなかったが、その所有者を突き止めることができた。松崎生まれ、日本医学の開拓者とされる近藤平三郎（1878～1963）である。さっそく美術館から遠くない近藤平三郎の生家に行くと、入江長八から贈られた自作の神農像が床の間に飾ってあった。高さ33.0センチ、幅21.5センチの大きさの彫刻で、1875年、長八の還暦記念した作品である。この作品が時には

入江長八美術館に借し出され、展示されていたと、遺族が語った。

(2) 大川三島神社の天井漢詩

大川三島神社の天井漢詩が神社本殿の天井部分が仰げる位置になる。天井全面が50センチ四方のほぼ正方形枠によって仕切られ、その正方形枠を数えると奥行き7枠、幅9枠。すべての正方形枠内に漢字が一字ずつ書かれていた。どの字もはっきり読み取れるのは昭和2年に上書きしたためとされ、江戸末期のもとの字は表面からは消えているという。

堯・舜・禹の三聖君を顕彰した漢詩であることが明らかである。天井の漢詩の全文は次のとおりである。

書靈彫桶虎龍蹲
 性命元誰不裔綺
 劍璽朶秭如日月
 帝王萬世照乾坤
 堯舜雨露何須讓
 禹蹟山川今尚存
 殿上白詩嗔父老
 落成靈廟着塵痕
 村恒題併隸

この詩に関する日本語訳及び疑問点については、本文の最後に紹介する、桜美林大学名誉教授植田渥雄氏の見解を記した「資料」を参照されたい。

漢詩の最後にある「村恒題併隸」は木村恒右衛門がこの詩をつくり隸書したという意味である。

木村恒右衛門とは大川地区の代々名主の家柄であり、「恒右衛門」を受け継いでいる。維新时期に地区長、静岡県議会発足後は議員に選ばれた最も広く知られる恒右衛門（本名：恒太郎）は1834年生まれで1884年に亡くなった。天井漢詩が書かれたと推定できる時代には、恒右衛門はまだ10代である。よって、天井漢詩は先代、つまり県議経験の恒右衛門でなく父親の恒右衛門（本名：

重正) だったというのが、山田宮司の説明であった。

ちなみに天井漢詩が書かれたころ、県議を経験した恒衛右門は江戸に出て、添川寛平に師事していた。添川は儒学者で頼山陽の弟子になる。10代であったが、後の活躍を思えばすでに漢詩にもすぐれたものがあり、父子の合作が天井漢詩かもしれない。

木村恒右衛門は大川地区の生んだ偉人であったため顕彰碑が木村家の屋敷跡脇に立っている。「竹の沢公園」として山麓にたち、神社を見下ろす位置にある。仙台の漢学者岡千仞(1832～1913)らによる長文の漢文で事績が綴られている。だが、木村家のいっさいの記録は失われたという。残されていれば、神社の沿革ももう少し詳しく分かったかもしれない。また漢詩の正確な原文も確認できたかもしれない。

天井漢詩では、禹の治水成果を詠っている。調査の内容によれば、大川地区においても水害や土砂崩れなど自然災害に見舞われることが多かった。治水神として禹をたたえる背景があったとみなければならない。とりわけ、1958年の狩野川台風のと大川地区を含め伊豆においては大規模な災害がないものの、それ以前には水害が多発であったということである。

(3) 2015年元日の大川三島神社

2014年の大晦日の三島神社の雰囲気とともに、この地区の神社における2015年の元日の状況をも調べることにした。

元日の朝9時から1時間ほどの間に約30人の初詣が数えられた。春には小学生になるらしい子ども母に連れられて拝んでいる。杖をついた白髪の年長者もいた。山田宮司によると、2014年の初詣の参拝者は300人くらいだという。大川地区のほとんどの人が参詣していると考えられる。別荘住まいの人々もかなり多いといわれる。

しかし、元日の9～10時過ぎの間に神社で天井漢詩を見上げる参拝者は、一人もいなかった。また、禹王について関心を示す者も現れなかったのである。天井まで気を配る余裕がなかったかもしれない。その原因に対する追跡調査は今後に託すほかない。

民衆の集う場所である神社に対して、皇居は権勢の指導者にかかわる。そ

ちらにも禹王に代表されるように、中華文明の影響が「混成文化」型の日本文明として息づいている。引き続き京都御所のそれを考察する。

3. 京都御所「だいうかいしゅぼうびず大禹戒酒防微図」の日本伝来の脈略を探る

同題の小論の一部は2013年7月、北京・故宮研究院の主宰する宮廷典籍と東亜文化交流国際学術研究会で「日本の大禹戒酒防微図小考」として発表し、同研究会が発刊した『宮廷典籍と東亜文化交流国際学術研究会論文集2013』と、『治水神・禹王研究会誌』創刊号（2014年4月1日）に掲載された。それを加筆修正の上、このたびの本論に転用した次第である。

(1) 京都御所『大禹戒酒防微図』と皇室文化

京都御所は京都市の中心部・上京区にあり、もとは天皇の第二の宮殿として建造され、1331年から1868年まで日常の起居に用いられたが、幕府の没落と王政復古に伴い江戸が東京と改名され、明治天皇は東京に移った。

『大禹戒酒防微図』はもとの京都御所の御常御殿にそのまま残された。酒の祖である儀狄が禹王に酒を献じる場面が描かれた華麗な襖絵である。京都御所で暮した天皇は後醍醐天皇から明治天皇の28代にわたる。歴代の天皇は1331



京都御所『大禹戒酒防微図』

年から1868年までの537年間『大禹戒酒防微図』と共に生活したことになる。

現在飾られているものは、幕末期の1855年、御用絵師で狩野派の画家鶴沢探真（1834～1893）が描いたもの（写真 王敏提供）。同じく狩野派の父・鶴沢探竜の画法を承け、代表作に『雨中鷺荷図』などがある。狩野派は日本絵画史上最大の画派で、室町時代中期（15世紀）から幕末（19世紀）にかけて400年にわたり隆盛を誇った。狩野派の最大の特色は中国起源の倫理道德体系を重視し、画法は日本の特色と鑑賞習慣とを結びつけ、幅広い層に好まれている。中国古代の帝王を描いた狩野派の作品で、京都御所に飾られた襖絵には、他に『高宗夢賚良弼図』と『堯任賢図治図』の二点がある。それぞれ座田重就と狩野永岳の手になり、『大禹戒酒防微図』と合わせて御常御殿の襖絵三図とされる。

『大禹戒酒防微図』がこの場所に置かれた目的ははっきりしている。禹王を模範として、自重、自尊、自戒、自勉、向上を怠らぬ伝統的精神を受け継ぎ、声望と徳を兼ね備えた君主となるよう期してのことと推察できる。日常の行動規範が主に中国古典に由来する聖王の仁徳を座右の銘とした伝統によるものである。記紀によれば、5世紀初、王仁という五経博士が百濟から来日、皇太子菟道稚郎子の教授を担当した。その時の教科書でもある『論語』に禹のありかたが度々取り上げられている。『論語』「泰伯第八の二十一」のくんだり及びその訳文をあげよう。

原文

子曰、禹吾無間然矣、菲飲食、而致孝乎鬼神、惡衣服、而致美乎黻冕、卑宮室、而盡力乎溝洫、禹吾無間然矣。

書き下し文

子曰わく、禹は吾間然とすること無し。飲食を菲くして孝を鬼神に致し、衣服を悪くして美を黻冕に致し、宮室を卑くして力を溝洫に盡す。禹は吾間然すること無し。

現代語訳

孔子がおっしゃいました、

「禹には非の打ち所がないな。質素な食事を食べてその分を神々や祖先の捧げ物とし、普段の衣服を質素にしてその分儀式的の礼服を立派にし、質素な宮殿に住んでその分を灌漑や治水工事に尽力した。禹には非の打ち所が無い。」

その理由は古来、天皇は大陸文化の学習と輸入にかけて、日常の行動規範が主に中国古典に由来する聖王の仁徳を座右の銘とした伝統によるものである。

また、順徳天皇（在位 1210～1221）の手になる古代の典章制度の研究書『禁秘抄』（1221）を事例にしてみよう。天皇が銘記すべき典章制度が記されてある同書は同時に守らねばならない行動指針であり、天皇家の家訓ともみなされている。『禁秘抄』には、天皇が学問を修める目的は、歴代の天皇のまつりごとの方法に通じ、明確な理念をもった政策で天下太平を継続させることだと記されている。この書は中国の帝王学の教科書『貞観政要』（720年以後の成立）の言行録を基準として編まれたものである。このことからわかるように、中華文明の要素を内包する倫理道徳は古くから皇室文化に浸透し、日本文化の一部として受け継がれてきているのである。

なお、多くの聖賢の中から禹王が選ばれた主な理由は、日本の風土に関連していると考えられる。周知のように、日本は古来地震と水害に苦しめられており、民衆の泰平のために最優先すべき責務は洪水と地震に対する防災対応である。故に江戸時代直前に、京都の鴨川の四条橋と五条橋界隈に複数の禹王廟が存在したと、大脇良夫、植村善博が調査結果を『治水神をたずねる旅』（人文書院、2013年、7頁）に記している。また、原始的農業生産時代であって、統治階級にとっての禹王は、庇護を祈願する神であると同時に、超人的な技能を備える科学者でもあった。恐らく、禹王の採った水はけを改善する治水の方法が日本に適応すると判断され、大陸で成功した経験として、手本に選んだとみなされた。

こうしたありかたが日本の古典に描かれた天皇の姿勢と重なることで、求められている天皇像とは何かが確認できる。これら古典のタイトルを二つの系統として示す。

①徳の高い君王に関する書物

『古事記』、『三教指帰』、『性霊集』、『徒然草』、『太閤記』、『折りたく柴の記』、『政談雑話』、『ひとりね』、『都鄙問答』など。

②治水の功績を評価する書物

『三壺記』、『政談雑話』、『誹風柳多留』、『風来山人集』、『地方凡例録』など。

ともあれ、禹王と皇室の間に古来保たれていた諸関係を検討していくと、御所の襖絵に『大禹戒酒防微図』が用いられた必然性が理解できる。天皇の日常の空間に、大型の禹王図が掲げられ、明確に物語が示されたことから、中国古代の聖人を手本とした日本の皇室文化に進取の精神と民生への敬虔が窺われる。

(2) 年号と禹王

今上天皇と禹王の関係はいつそう深くなったと思われる。平成の元号は『尚書』「大禹謨」にあるとされる「地平天成」を参考しているのである。土地が平穏に治まるさまを「平」、万物が豊作であるさまを「成」と、わずか四字の中に古代の賢王がまつりごとで目指した理想の境地があざやかに示されている。禹王が信仰されるのは、果たすべき職責を現状改善の実行に移した賢王だからでもあろう。

『開成石経』は「世界最大最重の書物」と称されるように、114基の石刻から成り、計65万字あまりで、唐・文宗の太和4年(830年)に完成した。『周易』『尚書』など12種の経書が収められた中に、『尚書』「大禹謨」の主人公である禹王も当然含まれている。1992年10月26日午前11時、初めて訪中した天皇陛下ご夫妻は西安にある碑林博物館を訪れ、『開成石経』を直接目にし、「平成」の文字を探し出したと伝えられている。時に日中国交正常化20周年の節目の年であった。

2013年の冬、天皇の誕生日講話を話題にしたNHKの番組⁸で、自然災害の

⁸ 2013年12月23日に放送された「天皇誕生日 傘寿を迎えられて」という45分間の番組にて、陛下のこれまでの歩みや被災地支援、平和への思いなどを関係者の証言を交えて伝えている。



図 1632年、狩野山雪が作画した「聖人十人図像」の内にある「大禹」。右上の賛には「大禹 / 地平天成六府三事 允治萬世永頼時乃功」とある。(東京国立博物館蔵)

中での日本への思いを陛下が述べられていたことが忘れがたい。また、それと並んで「平成」の言葉の由来に関する NHK のドキュメンタリーがあった。さらに、2014年4月21日に皇太子は千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館を訪れ、古代から近現代の日本の震災を紹介する企画展「歴史にみる震災」を視察した。

あらためて禹王の記述が見られる日本最古の文献、712年に編纂された『古事記』の序を、考えよう。そこでは、天明天皇の功績が禹王と比較されている。禹王を地域発展の参照枠としていたことの重要な証左となる。

大意は、「時の元明天皇の名は、夏の文命よりも高く、徳の高さは殷の湯王よりも優れている」。女帝・元明天皇の在位は、707～715年であった。

720年完成の『日本書紀』の孝徳天皇（在位645～654年）の項にも禹王の

徳を引合いに孝徳天皇への讃美を綴っている。禹王への意識が明々白々であり、「平成」が年号に取り上げられる意図は明瞭であろう。

以上を総合すると、およそ漢籍の日本伝来このかた、皇室は禹王にひとかたならぬ深い認識を抱いていたことが見てとれる。禹王が日本に定着してからは、帝王学と帝王図鑑の伝来に伴ってさらに広く伝播されるようになったと捉えられよう。禹王の「在日年輪」が重なる中、治水神として頼れる存在が重くなり、いつの間にか日本の信仰の対象に変わってしまい、禹王信仰が次第に根をおろすようになったであろう。

(3) 京都御所『大禹戒酒防微図』の参照となった中国の古典

現在の京都御所御常御殿の襖絵『大禹戒酒防微図』は寛永18年(1641年)の作を原作とするという。先に触れたように、幕末、狩野派の御用絵師によって完成した。明代後期の明代後期の1573年に刊行された『帝鑑図説』を参照していることが分かっている。『帝鑑図説』は明代の内閣首輔の大学士張居正が編んだもので、わずか十歳の幼帝・神宗(万曆帝)朱鋁鈞に帝王教育を施すための啓蒙書であった。隆慶6年(1572年)の完成後、唐・太宗の「以古為鑑」(古をもって鑑と為す)の語から『帝鑑図説』と名付けられた。その文には百十七幅の挿絵が配され、幼帝を喜ばせた。

『帝鑑図説』は上下二部に分かれる。上部は『聖哲芳規』と題され、堯・舜から唐宋代まで23人の古代の帝王の「其善為可法者(其の善にして法と為す可き者)」の事跡81則を収める。下部は『狂愚覆轍』と題され、夏・商・周の三代以下の20人の帝王の「悪可為戒者(悪にして戒と為す可き者)」の悪行三十六則を収める。「戒酒防微」の故事は『聖哲芳規』の第六則に収録されている。同書に配された「大禹戒酒防微」の挿絵(下図参照)は、京都御所の御常殿の襖絵に描かれた場景によく似ている。

同書の原本は現在台湾の故宮博物館に所蔵されてあると言われるが、中国でも相次いで影印出版されている。日本では国立国会図書館に所蔵される。うち『大禹戒酒防微図』に関連する挿絵は「掲器求言」「戒酒防微」「下車泣罪」の三枚である。

明代の挿絵入り刊本は斬新で手軽な表現形式をもって、周辺の地域にも広



く人気を博したという。それを日本が全面に吸収したことは、中国版の『三才図会』に基づく『和漢三才図会』の編纂具合からも窺える。

『三才図会』はもともと明・王圻と息子の王思義が編纂した図版を多く含む百科事典の類書である。明・万暦年間に完成し、108巻から成り、人物巻には部分的に帝王図鑑も含まれる。それを受けて日本では新たに『和漢三才図会』が編纂され、1712年に刊行された。その第15巻に中国の帝王図鑑の欄を設け、日本の禹王に関する碑文を紹介してある。下図は寺島良安著、遠藤鎮雄編『シ

リーズ 『日本庶民生活史料集成』 第28・29巻に引かれた『和漢三才図会』 卷十五（三一書房、1980年、296頁）に収められた禹王碑文である。発想の裾を広げて時代を遡れば、当時の各地に禹王信仰らしいものが各地に祭られていたろう。

明版本の古籍は大量に日本に流入したことにより、江戸時代の儒学と寺小屋の普及に有効に活用されたと想像できよう。

4. 時代精神と禹王信仰の現代的価値

(1) 江戸時代の精神性と禹王信仰

信仰の主体は民衆である。民衆の目指す精神的方向性が常に皇室と統治階級に連動しているのが日本の特徴である。それは精神文明の啓蒙と推進を皇室を筆頭に統治階級が牽引してきた史実によるからである。皇室を中心にした主流社会の教養は、16世紀以後の西洋文化の到来まで基本的に中国古典・漢文に基づいていた。日中のこうした特殊な文化的関

係ゆえに、江戸時代に中華文明の有用性が日本の発展に用いられ、徳川政権がその精華を精神性の方面に発揮させたといえよう。その成果がさまざまな政策に体现され、藩校の繁盛などに繋がった。また、全国各地に類似の儒学関連の祭祀が盛大に行われていた。なお、この方面の成果は従来、論じられて来たから、小文では改めて触れることとしない。

江戸の時代精神に合わせるように、禹王祭祀も地域ごとに展開されてきた。その中で日本最古の禹王祭祀と推察できるのは、1228年に京都の鴨川辺りに建立された「夏禹王廟」ではないか。詳細については、大脇良夫、植村善博の『治水神・禹王を訪ねる旅』（2013年、人文書院）を参照されたい。現在、痕跡と

大禹碑銘

承帝曰 庶翼輔佐 鄉州渚輿 登鳥獸之門 參身洪流 而明
發商興入 旅忘家宿 嶽麓庭智 管彤折心 罔弗辰往 來平
定華岳泰 衡宗疏事 哀勞餘仲 徑鬱塞昏 從南瀆行 亨衣
制食備萬 國其寧 鼠舞永奔

上述の大禹碑銘

見られるものがまだ発見されていないが、廟の性格上から何らかの形式での祭祀が行われていたと考えられており、なお考証が必要である。

禹王祭祀と信仰を形成した背景の一つに、和刻の帝王図鑑に描かれる人物が日本固有の天皇や将軍ではなく、『大禹戒酒防微図』にみられるような中国の賢君に定着した事情がある。日本人は『論語』などの経典と同様に、古代中国の賢人政治に憧憬の念を抱く。そして抽象的な聖人よりも治水という「実績」のある「禹王」を受容して、身近な「神」と奉るように受け入れた。北海道から沖縄まで、各地に広く伝わる禹王関連の史跡が示すのは、日本の民衆が禹王と共に生活文化の土壌を築いてきたということであろう。

同時代の日本人制作の帝王図鑑は枚挙に暇が無い。いずれも江戸時代の精神性の結実である。下図は『和漢絵本魁初篇』から借用したものである。

こうした現象は、当時の儒学が深く根付いていたことと民衆の求めるところに関係している。特に帝王図鑑や聖賢図に対する需要は、江戸時代の尊王思想と儒学を中心として発展した価値観、そして内政の統一に力を尽した官学の構造に重層されている。日本人と禹王の出会いはこのように経典だけではなかったことはいうまでもない。江戸時代の精神が一時代の文明を醸成したからである。いまでは想像できないほど、中華文明的教養が往時の日本人にあったことが想定できる。日本人と漢文と禹王とは案外、つい最近まで近しかったと言えるかもしれない。



(2) 禹王信仰を必要とした日本の自然風土

江戸時代の建立とされた禹王史跡の全国分布状況の内訳の概略を調べてみよう。検証の素材として本文の最後に一覧表を紹介するとともに、大脇良夫と植村善博の『治水神禹王をたずねる旅』（人文書院、2013年）から以下の表をまとめた。

禹王史跡全国分布—徳川時代建立—

地域	建立年	史跡名	都道府県名
関東	江戸期	禹廟	栃木県
関東	1849	大禹像碑	埼玉県
関東	1708	文命聖廟	埼玉県
関東	1721	河村君墓碣銘並序	神奈川県
関東	1726	文命東堤碑・文命宮 文命西堤碑・文命宮	神奈川県
中部	1797	富士水碑	山梨県
中部	1752	禹余堤・禹余石	長野県
中部	1838	禹王木像	岐阜県
中部	1837	禹王像画掛軸	岐阜県
中部	江戸期	「禹王さん」	岐阜県
中部	江戸末期	大禹王尊掛軸	岐阜県
中部	1819	水埜土惇君治水碑	愛知県
近畿	1719	夏大禹聖王碑	大阪府
近畿	1674	鳥道悦墓碑	大阪府
近畿	1753	小禹廟	大阪府
近畿	1823	金坂修道供養塔碑	兵庫県
四国	1637	大禹謨	香川県
九州	1819	明春寺鐘銘	佐賀県
九州	1740	禹稷合祀の壇と大禹后稷合祀石碑	大分県
九州	1740	禹稷合祀碑記	大分県
九州	1838	不欠塚	大分県
九州	1859	水天之碑	鹿児島県

※美術館・御所に保管されている禹王の掛軸や像などは除外している。

美術館・御所に保管されている禹王の掛軸や像などは除外すると、その内に関東：5件、中部：7件、近畿：4件、中国・四国：1件、九州：5件、約22

件の史跡が全国から見つかっている。すなわち 22 地域が水害で脅かされている現実が浮き彫りにされている。

それに対処する一連の対策案が練られた中、禹王信仰が精神的な面で役割を果たしたと認識できよう。角度を変えてみれば、江戸時代では日中間の文化関係、すなわち「知」の共有という歴史の蓄積を開発し、災害対応の施政に禹王信仰の作用を反映させたと捉えられよう。

日本は自然、人工を問わず、災害の博物館といわれるほどあらゆる災害にまわられる。なかでも川の増水による水害や土砂崩れで毎年尊い命が奪われる。現在でも繰り返される災害だから、古代から列島の人々はもっと頻繁に苦しめられてきたことは想像に難くない。何とかしたいと思ったとき、中国の大地における治水の成功者が見逃されるはずがない。日本にも渡ってきた司馬遷の『史記』に記述された禹の事績が目にとまったに違いない。明治以降でも、大阪の淀川治水、広島市の太田川治水、愛知県の本曾川治水などで記念碑建立が確認されている。

繰り返して強調することになるが、日本列島が自然災害に苦しんだ中で、とりわけ江戸時代の受難が甚大である。例えば、広島市安佐南区佐東町の大禹謨は太田川の右岸にあり、その裏に次のような碑文が彫られている。

「人生の哀歓を秘めた太田川 清澄な流れはわが町の政治、経済、文化に大きく寄与し又われわれの生活に父祖の生活に潤いと安らぎを与えてくれた。しかし濁流は多年に亘って水と戦った人々の苦難の歴史を創った。元和、寛永、承応、嘉永、明治 7 年・17 年、大正 8 年・12 年・15 年、昭和 18 年・20 年の水禍は大きく、特に承応 2 (1653) 年の洪水には死者 5,000 人余に達したという。近く昭和 18 (1943) 年の大出水は八木村、川内村、緑井村の堤防を決壊し濁流は全村に流れ込み尊い人命と多くの財宝を奪い惨状被害は筆舌につくし得ないものがあつた。水禍に対する住民の苦悩は深刻であつた。当時三村の財政力では根本的な治水工事は出来なかつた。幸い地元住民の協力により昭和 7 年より国費により改修が進められ 40 年星霜と 30 数億円の巨費を投じられ、太田川中流部の改修がかない願望の古川締め切り工事も昭和 44 年 3 月に完成し、近く高瀬堰の完成を見るに至つた。永年に亘って父祖の努力と吾々の要望が

身を結び偉業を成し遂げられたことを町をあげて喜び黄河の水を治めた夏の禹王の遠大なはかりごとにあやかり、大禹謨を建立して太田川の歴史を偲び治水の大業を称える。昭和 47 年 5 月 20 日佐東町長 池田早人 』

1972 年に建立されたこの石碑はむしろ、新しい。だが、背負っている治水の歴史は長くて重い。それは江戸時代を中心とした被災史であり、受難史でもある。生存環境の改善願望に常に治水の成果に期待をかけている。日本全土に分布した禹王祈願関連の史跡が民衆と禹王との依存関係を示し、治水信仰の民俗的土壌が築かれた風土を探らせて見せてくれた。

(3) 禹王信仰及びその研究の現代的価値

世界文明史の中でも、日中間の文化関係は密接である。5 世紀ごろ、漢字を借用して、漢字文明を主軸とする発展戦略を推進した日本が、漢文に由来する価値観ないし教養基盤を形成させ、江戸時代に燦爛たる開花をした。いうまでもなく、大川三島神社と京都御所『大禹戒酒防備図』が江戸時代の花二輪とも捉えられる。

また、日本における禹王研究成果の一部を整理したところ、「最古」(現時点)とされる関連文物または記録を史的に俯瞰することができる。

1. 日本最古の禹王廟

今は失われたが 1228 年の京都・鴨川の禹王廟である。多くの文献に「夏禹王廟」に関する記載があり、京都の四条と五条の間の禹王廟が江戸時代前期まで存在していたことが知られる。

2. 日本現存最古の禹王碑とシンボル

1637 年香川県高松市の「大禹謨碑」。

1630 年に鑄造された禹王の金像。高さ約 80 センチメートル、現在は名古屋の徳川美術館に収蔵される。

3. 日本最古の文献記録

712 年編纂の『古事記』序

720 年に刊行された『日本書紀』にも記載が見られる。

伏惟、皇帝陛下得一光宅、通三亭育。御紫宸、而德被馬廐之所極、坐玄扈、而化照船頭之所逮。日浮重暉、雲散非烟。連柯并穗之瑞、史不絶書、列烽重詛之貢、府無空月。可謂名高文命、德冠天乙矣。

於焉借旧辞之誤件、正先紀之謬錯、以和銅四年九月十八日、詔臣安万侶、撰錄神田阿礼所誦之勅語旧辞以獻上者、謹隨詔旨、子細採摭。然上古之時、言、意並杜、敷文構句、於字即難、已因訓述者、詞不盡心、全以音准者、事趣更長、是以今、或一句之中、交用音訓、或一事之内、全以訓錄、即辟理巨見、以注明、意況易解、更非注。亦於姓日下謂致沙訶、於名帶字謂多羅斯、如此之類、隨本不改。大抵所記者、自天地開闢始、以訖于小治田御世。故天御中五神以下、日子波限建鸕草葺不合命以前為上卷、神倭伊波比古天皇以下、品陀御世以前為中卷、大雀皇帝以下、小治田大宮以前為下卷、并錄三卷、謹以獻上。臣安万侶、誠惶誠恐、頓首々々。

和銅五年正月廿八日

正五位上勳五等太朝臣安万侶

而滯留。春夏捕魚充食。彼嶋之人、言非人也。亦言鬼魅、不敢近之。嶋東禹武邑人、探拾椎子、為欲熟喫。着灰裏、炮。其皮甲化成二人、飛騰火土、一尺餘許。經時相闘。邑人深以為異、取置於庭。亦如前飛、相闘不已。有人占云、是邑人、必為魅鬼所迷惑、不久如言、被其抄掠。於是、肅慎人移、就瀬波河浦。々々神嚴忌。人不取近。渴飲其水、死者且半。骨積於巖岫。俗呼肅慎隈也。六年春三月、遣膳臣巴提便、使于百濟。○夏五月、百濟遣奈率其棧、奈率用奇多、施德次酒等、上表。○秋九月、百濟遣中部護德菩提等、使于任那。贈泉財於日本府臣及諸旱蛟、各有差。○是月、百濟遣丈六佛像。製願文曰、蓋聞、造丈六佛、功德甚大。今敬造。以三此功德、願天皇獲勝善之德、天皇所用、彌移居國、俱蒙福祐。又願、普天之下、一切衆生、皆蒙解脫。故造之矣。○冬十一月、膳臣巴提便、還自百濟言、臣被遣使、妻子相逐去。行至百濟濱、暎日既停宿。小兒忽亡、不知所之。其夜大霧。天曉始求、有虎連跡。臣乃帶刀、撰甲、尋至巖岫。拔刀曰、敬受絲綸、劬勞陸海、櫛風沐雨、藉草↓

4. 日本最古の禹祭

禹王研究会の調査研究によると、1228年に京都鴨川に建立された「夏禹王廟」では何らかの形式での祭祀が行われていたが、なお考証が必要である。

5. 治水神・禹王研究会の調査では、今日に至るまで禹祭が各地で約10件ぐらいあるものの、一層の考察が必要と考えられている。

有史以来の日本文化の特徴として、「混成性」を指摘した。西洋的な宗教及び宗教観とは異なり、日本においては、東アジアにおける宗教や信仰の要素が様々に取り入れられ、その混成的な信仰文化を形作っていった。それを検証する一端として、禹王信仰及び関連する行事、祭祀、習俗となった事例が取り上げられる。また、民間信仰の領域では、日中韓など漢字文化圏の相互浸透が持続されている史実がある。禹王信仰がこうした背景のもとに生成した象徴的な事例だと認識されよう。この角度から推察していけば、恐らくお互いに自他認識を深化させ、相互理解の一助になることも期待されるかもしれない。

例えば、禹王信仰の調査を通して、検証できた収穫の一つには、戦火を乗り越えて信仰が継続できた事実である。それは2014年7月現在、日本各地に132か所以上の禹王に関連している寺社、石碑などの中で、18か所が日清戦争以来の建立であることが確認されている。

なお、現在までに確認されている禹王の名前に関連した碑は日本国内で30数か所にのぼり、禹王の名前が入った地名や碑文内に禹王の名前が記されているものが30数か所近く現存している。それらの多くが河川沿いに位置しており、禹王は郷土を水害から守ってくれる守り神、「治水の神」として不動である。禹王信仰が決して過去の遺産だけではなく、現代人の生活の一部として協働社会に「同居」しているのである。

禹王が現在にも生きているということは、何よりも青少年の公共教養の教材になれることを主張したい。中国の教科書では、禹王はもちろん取り上げられてある。例えば、人民教育出版社から発行されている歴史教科書では、その治水の業績や中国史上における位置づけなどが紹介されているし、国語の教科書にも、禹王の治水を中心とした業績を紹介する文章や『史記』の禹王の部分が掲載されている（江蘇教育出版社版）。日本においても、山川出版社の『世界史』には、簡単ではあるが、禹王の治水の功が触れられており、国語の教科書（高校『古典 漢文編』や大修館書店『古典講読』など）にも「鼓腹擊壤」などの故事の注釈内で禹王が紹介されている。また「文命西堤の文命宮と文命碑」

1894～1972年の78年間の18遺跡を年代順で紹介する一覧（大脇良夫作成）

年代	遺跡名称と禹の「刻字」	所在地（水系と県名）	日中関係など主な事件
1895	船橋隋庵水土功績之碑「大禹聖人」	利根川、千葉県野田市	1894～1895年 日清戦争 1898年列強の中国分割 1899～1901 北清戦争（義和団事件）
1896	篠田・大岩二君功労記功碑「神功禹蹟」	日野川、鳥取県伯耆町	
1897	川村孫兵衛紀功碑「神禹以後唯有公」	北上川、宮城県石巻市	
1900	禹功德利「其業何為讓禹功」	木曽川、愛知県愛西市	
1908	禹功門	揖斐川、岐阜県養老郡	
1908	川口修提之碑「嗚呼微禹 吾其魚乎」	旭川、岡山県岡山市	1911年 辛亥革命 1912年 清朝滅亡
1909	淀川改修紀功碑「以称神禹之功」	淀川、大阪市都島区	
1912	九頭龍川修治碑「称功軼神禹矣」	九頭龍川、福井県福井	1915年 日本、中国に二十一か条要求
1919	禹王之碑「禹王之碑」	利根川、群馬県沼田市	
1923	治水翁碑「是頡頏神禹功」	淀川、大阪府四條畷市	
1923	大橋房太郎君紀功碑「大禹ノ水ヲ治ムルヤ」	淀川、大阪府四條畷市	
1923	西田明則君之碑「大禹治水」	東京湾、神奈川県横須賀市	
1924	黄檗高泉詩碑「何人治水功如禹」	桂川、京都市西京区	
1928	句仏上人句碑「禹に勝る業や心の花盛」	信濃川、新潟県燕市	1931年 満州事変 1932年 満州国建国宣言 1937年 盧溝橋事件、日中戦争開始、南京事件
1936	砂防記念碑「開荒成田 禹績豹功垂」	魚野川、新潟県南魚沼郡	
1937	古市公威像「不讓大禹疏鑿之功」	東京大学正門、東京都文京区	
1954	大樽川水門改築記念碑「禹功門」	揖斐川、岐阜県養老郡	
1972	大禹謨「大禹謨」	太田川、広島県広島市	1972年 日中国交回復 1978年 日中平和友好条約調印 1977年 文化大革命終結宣言、1992年中国と韓国国交

（神奈川県）の近くにある神奈川県開成町の小学校では、先に述べた郷土史家の調査グループ「足柄の歴史再発見クラブ」が作成した町の歴史を紹介する冊子が副教材として使用されている。禹王の記念碑ともに禹王の治水績が記さ

れているのである。これらの事例からわかるように、禹王は様々な点において、日中両国が共有する文化財と教養の素材になっている。

「禹王」が日中両国の共有文化財になったことが裏付けられているだけに、禹王信仰の「再発見」を通して、禹王という事例を導きの糸とすることによって、青少年を主体とする「日中間の相互学習」が求められよう。

5. 終わりに 禹王信仰研究の課題

禹王信仰にまつわる時代という枠組の重要性が見えてきた。こうした現代人の日常でもある生活化された信仰を考察していくと、禹王を含めた共有知を成立、伝承可能にした核心的「媒介」が浮き上がった。それは漢字であろう。漢字が共有知の連鎖を永恒に循環させる舵であることが再認識された。禹王信仰が繋がっていたのは古典的漢字文化圏だけではない。それを基盤に現代人の生活が成り立っている。ならば、禹王信仰に関する調査研究の展開が未来を接続させる一つの「接点」装置とも理解できよう。

漢字文明が日本文明の成り立ちに大きく影響していると思われることは、古からすでに共有ずみの認識とはいえ、それ以来千年以上の歴史的文化的変遷を体験した現在、その「古典的」面がなお存続されているか、それに対する認識の度合いが変容されていたか？いずれも「混成文化」の存続価値と意義を検証するに値する課題と考えられる。

他方、日本列島はユーラシア大陸の東端にあるため、先史時代より異邦人が流れ着く位置を占めてきた。当然のことながら列島に移り住んだ人たちによる多文化も蓄積してきた。その結果、多様な文化が列島で混交する中で新型文化が生成することになった。こうした「混成文化」型の日本文化にどのようにアプローチするのか、アプローチも多様にならざるを得ない。そのため、国内外に共に求められる研究課題への検討及び確認が期待されている。

近年、アジア諸国で注目を集めているのが日本の「禹王信仰」である。中国最古の夏王朝の王といわれた禹王は、中国において長らく治水のリーダーとして尊敬を集めてきた。日本においても治水が第26代の継体天皇の九頭竜川治水以来、各時代の重要な営みとして記紀等に記録され、禹王を治水神と

位置付けてきた。治水神・禹王研究会の調査により、神奈川県南足柄地域にある福沢神社で禹王祭りが300年もの間、続けて行われたことが分かった。全国39の地域に禹王信仰に関係する史跡文物の132か所の発掘調査成果が発表されている。また、禹王への信仰の形態が現代日本に存続され、その特徴の一部がアジア諸国とも共有される実態が、筆者の初期調査により示されていることが分かった。

ともあれ、日本の禹王信仰を通して「混成文化」の特質が考案され、日本文化に吸収された異なる地域文化の縦横が検証されている。日本文化の新たな発信につながる事例として期待している。禹王信仰の現存形態及びその現代価値への解析によって、深淵なる課題と参照事例を浮き上がらせ、漢字文明の一翼でもある日本研究に寄与できると思われる。

参考文献

- 王敏『禹王と日本人』NHK出版、2014年
 王敏『漢魂と和魂』中国・世界知識出版社、2014年
 王敏「漢字がつなぐ東アジア「生活共同体」」「5 伝統文化「生活共同体」、松岡正剛編、『NARASIA 東アジア共同体』、丸善、2010年6月15日、pp.393-395
 王敏「日中韓の歴史的文化的共有性 - 東アジア文化圏の接点 -」、『国際日本学とは何か？ 東アジアの中の日本文化 - 日中韓文化関係の諸相 -』、法政大学国際日本研究センター、2013年3月29日、pp.438-441。
 王敏「(私の視点) 中国人観光客 地方でこそ文化観光交流を」、『朝日新聞』、2010年8月2日
 王敏「日中韓の共福の原点 - 東アジアにおける「公共教養」と「公共哲学」の基盤」、《公共的良識人》11月号、2012年11月
 王敏「<治水の神>日中の懸け橋 古代中国の王<禹>をたどる」、『朝日新聞』、2013年6月17日
 大脇良夫 植村善博『治水の神禹王をたずねる旅』、人文書院、2013年5月
 新井白石「折りたく柴の記」、桑原武夫編『日本の名著 15 新井白石』、中央公論社、1983年
 荻生徂徠「政談」、尾藤正英編『日本の名著 16 荻生徂徠』、中央公論社、1974年
 田中健夫「勘合貿易」、『対外関係史辞典』、吉川弘文館、2009年
 杉原たく哉『中華図像遊覧』、大修館書店、2000年
 武田恒夫『狩野派絵画史』、吉川弘文館、1995年
 高木文恵、『伝統と革新 京都画壇の華 狩野永岳』、彦根城博物館発行、2002年

資料1 桜美林大学名誉教授植田渥雄氏による大川三島神社の天井漢詩（静岡県東伊豆町の
大川温泉地区）の日本語訳及び指摘

天上漢詩

畫櫃彫桶虎龍蹲	畫櫃 彫桶 虎龍 蹲る
性命元誰不裔綉	性命の元 誰か裔綉ならざらん
劍璽染秋如日月	劍璽秋を染ること日月の如し
帝王萬世照乾坤	帝王 萬世 乾坤を照らす
堯天雨露何須讓	堯天 雨露 何ぞ讓るを須ひん
禹跡山川今尚存	禹跡 山川 今尚ほ存す
殿上白詩噴父老	殿上に詩を白せば父老を噴らしめんか
落成靈廟着塵痕	落成せる靈廟に塵痕を着したりと
村恒題併隸	村恒題し併せて隸す

絵や彫刻を飾った窓格子や柱(?)には虎と龍が蹲っている。
 生命の源から見れば誰もが皆袈裟桶のように広がる同じ末裔である。
 王劍玉璽(王位の象徴)は日月のように秋の恵みを垂れる。
 帝王は萬世にわたってこの天地を照らしている。
 堯のもたらす雨露の恵みは何物も拒みようがない。(讓には拒む、辞退するの意がある)
 禹の功績によって与えられたこの山川は今も変わることがない。
 今私が天井にこんな詩を書いて進上すれば村のお偉い衆からお叱りを受けるだろうか。
 折角出来上がった靈廟に汚れを付けてしまったと……。

[形式]

七言律詩。平起式、元韻。押韻と平仄に二か所問題があるが、ほかはすべて作法に叶っている。

[疑問点]

- ① 「彫桶」の桶、これが果たしてどんなものか、まさか「おけ」ではないと思うがよくわからない。あるいは「櫃」のつもりか。しかし「櫃」に絵や彫刻を飾るだろうか。実際の情景を見れば何か思いつくことがあるかもしれない。取り敢えず柱と訳してみたが自信はない。

資料2

日本禹王遺跡一覧

治水神・禹王研究会禹王遺跡認定委員会編

2016年10月10日現在

地域別番号 A:北海道・東北, B:関東, C:中部, D:近畿, E:中国・四国, F:九州・沖縄

地域別番号	遺跡名称	年代等	所在地	河川名等	通番
A 1	禹甸荘碑	1988 昭和	北海道	千歳川支流唼淵川	1
A 2	川村孫兵衛紀功碑	1897 明治	宮城県	旧北上川	2
A 3	大禹謨	2001 平成	秋田県	矢島(歴史交流館)子吉川	3
A 4	大町新渠碑	1880 明治	山形県	相沢川	4
A 5	大禹之碑	1862 江戸	宮城県	鳴瀬川	5
B 1	禹廟	江戸期	江戸 栃木県	鬼怒川	6
B 2	大禹皇帝碑	1874 明治	群馬県	片品川	7
B 3	禹王之碑	1919 大正	群馬県	利根川水系浮川	8
B 4	大禹像碑	1849 江戸	埼玉県	江戸川	9
B 5	文命聖廟	1708 江戸	埼玉県	元荒川	10
B 6	船橋随庵水土功績之碑	1895 明治	千葉県	利根川	11
B 7	古市公威像	1937 昭和	東京都	(東京大学正門)	12
B 8	大禹像画(歴聖大儒像)	1632 江戸	東京都	(林羅山邸湯島聖堂)	13
B 9	人力車発明記念碑	1900 明治	東京都	台東区谷中(長明寺)隅田川	14
B 10	西田明則君之碑	1923 大正	神奈川県	東京湾	15
B 11	河村君墓碣銘	1721 江戸	神奈川県	鎌倉(建長寺)	16
B 12	文命東堤碑・文命宮	1726 江戸	神奈川県	酒匂川	17
B 13	文命西堤碑・文命宮	1726 江戸	神奈川県	酒匂川	18
B 14	神浦堤成績碑	1870 明治	茨城県	利根川水系小貝川	19
B 15	導水遺蹟碑	1806 江戸	栃木県	小貝川水系元川	20
B 16	幸田露伴文学碑	1990 平成	東京都	江戸川	21
B 17	新梁之碑	1866 江戸	埼玉県	旧利根川	22
B 18	白井小衛門高須築堤回向碑	1826 江戸	茨城県	梶無川	23
B 19	小久保喜七君頌徳之碑	1926 大正	茨城県	利根川	24
B 20	渡良瀬川治水紀功碑	1926 大正	茨城県	渡良瀬川	25
B 21	堤記	1726 江戸	神奈川県	酒匂川	26
B 22	文命御宝前(手洗鉢・東堤)	1727 江戸	神奈川県	酒匂川	27
B 23	文命大明神御宝前	1727 江戸	神奈川県	酒匂川	28
B 24	奉再建文命社御宝前(東堤)	1807 江戸	神奈川県	酒匂川	29

B	25	文命橋	1931	昭和	神奈川県	酒匂川	30
B	26	文命用水碑	1936	昭和	神奈川県	酒匂川	31
B	27	文命隧道(額碑)	1933	昭和	神奈川県	酒匂川	32
B	28	開成町立文命中学校	1947	昭和	神奈川県	酒匂川	33
B	29	新文命橋(文命隧道出口)	1971	昭和	神奈川県	酒匂川	34
B	30	文命橋(文命隧道入口)	1983	昭和	神奈川県	酒匂川	35
B	31	文命御宝前(手洗鉢・西堤)	1727	江戸	神奈川県	酒匂川	36
B	32	文命堤床止工	1971	昭和	神奈川県	酒匂川	37
B	33	関東大震災記念碑(西堤)	1924	昭和	神奈川県	酒匂川	38
B	34	文命用水放水門		昭和	神奈川県	酒匂川	39
C	1	富士水碑	1797	江戸	山梨県	富士川	40
C	2	禹除堤・禹除石	1752	江戸	長野県	天竜川	41
C	3	句佛上人句碑	1928	昭和	新潟県	信濃川	42
C	4	砂防記念碑	1936	昭和	新潟県	魚野川	43
C	5	九頭龍川修治碑	1912	明治	福井県	足羽川	44
C	6	和田光重之碑	1879	明治	岐阜県	揖斐川水系牧田川	45
C	7	禹王木像	1838	江戸	岐阜県	揖斐川	46
C	8	禹像画掛軸	1838	江戸	岐阜県	揖斐川	47
C	9	禹王さん 灯籠	江戸期	江戸	岐阜県	揖斐川	48
C	10	大禹王尊掛軸・同祠堂	江戸期	江戸	岐阜県	揖斐川	49
C	11	禹功(開)門	1903	明治	岐阜県	大樽川	50
C	12	大樽川水門改築記念碑	1954	昭和	岐阜県	大樽川	51
C	13	禹功德利	1900	明治	愛知県	木曾川	52
C	14	水埜土淳君治水碑	1819	江戸	愛知県	庄内川水系新川	53
C	15	禹金像	1631	江戸	愛知県	(徳川美術館)	54
C	16	大塚邑水路新造碑	1797	江戸	山梨県	笛吹川	55
C	17	加治川治水碑	1913	大正	新潟県	阿賀野川水系加治川	56
C	18	禹泉江・禹泉用水	1716~1735	江戸	新潟県	加治川	57
C	19	岸本君治水碑	1856	江戸	新潟県	国府川	58
C	20	足羽宮之碑	1830	江戸	福井県	足羽川	59
C	21	金森吉次郎翁寿像記	1923	大正	岐阜県	揖斐川	60
C	22	大禹謨	2004	平成	三重県	伊賀上野(正崇寺)木津川	61
C	23	大川三島神社拝殿天井漢詩	1853	江戸	静岡県	東伊豆町(大川三島神社)	62
C	24	関田嶺修路碑	1849	江戸	新潟県	上越飯山線県境	63

C	25	禹之瀬河道整正事業竣工の碑	1995	平成	山梨県	富士川	64
C	26	地平天成碑	1997	平成	岐阜県	木曾川水系四ツ目川	65
C	27	大聖禹王廟碑	1809	江戸	長野県	天竜川	66
C	28	天流功業義公明神碑	1809	江戸	長野県	天竜川	67
C	29	大窪邸中邸氏懇田硯記碑	1792	江戸	長野県	天竜川	68
C	30	金森吉次郎墓碑	1930	昭和	岐阜県	揖斐川	69
D	1	禹王廟（現存せず）	1228	鎌倉	京都府	鴨川	70
D	2	大禹戒酒防微図（襖絵）	1855	江戸	京都府	(京都御所)鴨川	71
D	3	黄檗高泉詩碑	1924	大正	京都府	桂川	72
D	4	夏大禹聖王碑	1719	江戸	大阪府	淀川	73
D	5	瀬河洪水記念碑銘	1886	明治	大阪府	旧淀川[大川]	74
D	6	修堤碑	1886	明治	大阪府	淀川	75
D	7	明治戊辰唐崎築堤碑	1890	明治	大阪府	淀川	76
D	8	淀川改修紀功碑	1909	明治	大阪府	淀川	77
D	9	島道悦墓碑	1674	江戸	大阪府	旧中津川[淀川]	78
D	10	大橋房太郎君紀功碑	1923	大正	大阪府	淀川水系寝屋川	79
D	11	治水翁碑	1923	大正	大阪府	淀川水系寝屋川	80
D	12	小禹廟	1753	江戸	大阪府	大和川	81
D	13	金坂修道供養塔銘	1823	江戸	兵庫県	加古川水系柏原川	82
D	14	長松屋台の露盤	2010	平成	兵庫県	姫路(魚吹八幡宮)揖保川	83
D	15	益田池碑銘並序（復刻）	1900	明治	奈良県	高取川	84
E	1	修堤之碑	1908	明治	岡山県	旭川水系誕生寺川	85
E	2	篠田・大岩二君功勞記功碑	1896	明治	鳥取県	日野川水系	86
E	3	大禹謨	1637 頃	江戸	香川県	香東川	87
E	4	大禹謨	1972	昭和	広島県	太田川	88
E	5	大町村用水釜乃口石ふみ	1852	江戸	愛媛県	加茂川	89
E	6	潮音洞	1681	江戸	山口県	錦川支流渋川	90
E	7	鱈石生雲碑	2014	平成	山口県	榎野川/ふしのがわ	91
E	8	禹余糧石			岡山県	足守川	92
F	1	明春寺鐘銘	1819	江戸	佐賀県	嘉瀬川	93
F	2	禹稷合祀の壇	1740	江戸	大分県	臼杵川	94
F	3	禹稷合祀の碑, 同碑記	1740	江戸	大分県	臼杵川	95
F	4	不欠塚	1838	江戸	大分県	臼杵川	96
F	5	水天之碑	1859	江戸	鹿児島県	大浦川	97

F	6	区画整理竣工之碑	1989	平成	鹿児島県	大浦川	98
F	7	宇平橋碑	1690	江戸	沖縄県	長堂川	99
F	8	宗像堅固墓碑	1884	明治	熊本県	方原川	100
F	9	一田久作墓誌（現存せず）	1772	江戸	福岡県	遠賀川	101

日本禹王地名一覧

地域別番号		遺跡名称	年代等		所在地	河川名等	
A	1	禹父山(地名)	江戸期	江戸	福島県	阿武隈川	1
C	1	禹の瀬			山梨県	富士川	2
E	1	禹余糧山			岡山県	足守川	3

日本禹王文字遺物一覧

地域別番号		遺跡名称	年代等		所在地	河川名等	
C	1	奉納北越治水策図解	1898	明治	新潟県	弥彦神社	1
C	2	禹門の額			富山県	黒部川第4発電所	2
E	3	禹門の額(複製)			兵庫県	太田垣士郎翁資料館	3

<ABSTRACT>

A Historical and Cultural Connection between Japan and China: In the Case of Memorial Customs of Dayu

WANG Min

Dayu is the emperor of China's earliest dynasty, the Xia Dynasty. This paper explains the cultural background of how Dayu was introduced to Japan, and the history of how he became the God of water control in Japan. The famous painting of Dayu in which he is exhorting people on quitting alcohol, has been a masterpiece of the Imperial palace in Kyoto. This fact is highlighted in this paper as the author examines and compares the key characteristics of that period of the history of Japan. The author also uses this study on Dayu in Japan as an entry point to illustrate the continuous influence of folk beliefs on Japanese identity. This new perspective is an expansion to the study of a historical and cultural connection between Japan and China.